

猫の恩返し・江津市波積本郷

令和3年7月6日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男語り手 柳原ヒサコエさん
(昭和8年生まれ)
収録・平成13年7月31日

あらすじ

昔。一人息子が、「今もどりましたでな。かあさん、何をそんなに怒つとるかな」この猫が魚を盗ったので、目をつぶしてやろうと思うとる。早うつかまえてくれ」。かあさんが言うたげな。息子が「かわいそうなから今日はこらえてやつてくれ」と息子が断りを言ったので、その日はそれで終わったげな。

明るる日また仕事に息子が出ていったが夕方帰ってきても猫がいない。おかあさんは「今日も魚を盗ってしもうた。目をつぶして追い出してやつた」とかんかんに怒つたげな。

息子はその猫を捜して旅に出たげな。とつぷり日も暮れてはもうたげな。泊まろうには宿はなし、猫の名前を呼びながら歩いていったら、遠くに青い寂しそうな灯がぼつんと一軒見えた。「今晚は、旅の者です。一晚泊めてください」と頼んだ。そしたらきれいな娘さんが出てきた。「どうぞ、何もおかまいはで

きませんが、お泊まりくださいませ」て泊めてくれたげな。

まもなく、「今晚は、お母さん、今夜はこれにはお客さんが見えたそうで」「おお、よう来た、早う上がつてごをしてくれえや」。そして旅人は疲れてぐうぐう休んでおつたげな。

夜中に、何か騒がしい音がする。はっと目が覚めてみたら、その娘さんたちが母さんと全部で何かごそごそ話してると。「おかしいなあ」。すると一人の娘さんが傍に来て、「旅人。ここにおつてはあなたを食われてしまう。早く目隠しをしてわたしの背中にさばつてください」と、そうつと起こしたげな。娘さんにおんぶしてもらつて、ずいぶん歩いたと思われる。そうすると娘さんが背中から降ろして、「わたしはあなたのとこで飼つてもらつておつたネコマタだが、早く逃げてくださいな」と言うて助けしてくれたげな。ネコマタのお話でした。猫は三日すりゃあ恩を忘れるというが、それは嘘です。というお話でした。それぼーっちり。

解説

猫の恩返しの話である。猫を扱った多くの話では、歳を取った飼ひ猫は、その家のお婆さんを食い殺したりする妖怪になったりする事がある。この連載の中でも浜田市三隅町東平原で聞いた松岡宗太さん(明治29年生)の「菖蒲が迫の婆」がそれであり、結果的には退治されることで話が終わる。同様の筋書きを持つ、松江市の一小池の婆さん」の話もよく知られている。

ところがこの江津市波積本郷の話は、それらとは異なり、かわいがつてくれた飼ひ主の危険を、身を挺して助けようとする猫の話であり、猫を主題としたものとしては珍しいものようだ。

これは波積ダム建設に伴う文化財調査として、江津市教育委員会が島根県浜田河川総合開発事務所委託を受けて調査したとき、筆者も調査員の一人から現地に入り、地元の方々から聞き書きをしたものの一つである。語り手の柳原ヒサコさんご一家とは、今も時々交流しているのである。

(元島根大学法文学部教授)

